死神召喚

ハシルケンシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神召喚

【Ｎコード】
Ｎ０３２１Ｆ

【作者名】
ハシルケンシロウ

【あらすじ】
プロ野球団旭川マーベラスは、経営不振に陥っていた。その煽りを喰ってしまったマーベラス三塁手稲葉晴信は、元チームメイト小野匠人投手と結託して、その元凶に対する復讐を目論む。

1　稲葉晴信は恨みを持っている（前書き）

この作品は、昨年開催された【夏ホラー２００７】の特設サイトに書き下しで投下させて頂きました【一球入魂】を大幅に加筆訂正したものです。

1　稲葉晴信は恨みを持っている

さあ　お仕置きの時間だ

【死神召喚】

２００８年８月１８日、旭川マーベリックコロシアム。この日、このドーム球場では宇都宮ノワール対旭川マーベラスのナイターが組まれていた。

いつものパ・リーグ公式戦。いつもの通りに打席に入り、いつもの通りにサードの守備に入る。全くいつもと変わらない日常がそこにある……、筈だった。

だが、このゲームは違う。人知れず、悪魔との契約が交されてい

るゲーム。契約によって、白い死神が召喚されるゲームなのだ。

取っ掛かりは去年の暮れまで遡る。

「ちょっと待ってくださいよ、俺ちゃんと出来高達成してるじゃないですか！」

ただでさえ、無理難題に近いような出来高契約だった。

【１００試合無失策】【５０試合連続無三振】【１４０試合出場】【１０試合連続出塁】【３割３０本３０盗塁】【１２０安打】

最低保証年棒２４０万円に、上記の出来高契約がセットとなった、総額２億８０００万円という5年間の複数年契約だ。

契約初年度の一昨年は殆んど達成出来なかったこともあって、結果的な年棒の総額は７０００万円にしかならなかった。当然この程度の額なら、全額払って貰えたのだが……。

問題の去年だ。一昨年大変に不本意な成績に終わった俺は、挽回しようと必死になっていた。

体が壊れてしまわないレベルでの限界まで続けたフリーバッティング、警戒され始めたときに意表を突くためのバント練習、時々股が痙攣を起こすほど粘った盗塁練習、週2回の2千本ノック。

シーズン前には、過労で倒れたこともあった。だが、その努力の見返りはとても大きい。

無理難題でしかなかった筈の出来高契約６つを全て達成出来たのである。

当然、契約した総額２億８０００万円の給料を満額出して貰える筈なのだ。それなのに……、旭川マーベラスは、経営不振によりお支払いできませんと、俺の血と汗の結晶をむげに踏みにじって来たのだ。

無い袖は振れない。そんなことは解っている。言われなくても解り切っている。だから俺も、

「来年の給料に上乗せでもいいですから、絶対に出してください」

という妥協案を出して、渋々その場を引き下がったのである。

なのに、それなのに今月、税金、保険料諸々を引かれた１２万円しか振り込まれていなかったのだ。それを原因として、妻から三行半を叩き付けられ、一男一女をどちらも持って行かれるという最悪な結果を伴った。俺には何の責任も無いのと、金が無いのを知っていたため慰謝料を請求されなかったのがせめてもの救いだ。

球団在籍８年目、奴、本柳照文のせいで失ったものはあまりにも大きい。昨年ＦＡした匠人のように、複数年契約でなければ俺も移籍している。だが、５年契約であったがためにこの状況を回避することすら出来ないのだ。

今日の対戦相手、宇都宮ノワールには昨年ＦＡ宣言によりマーベラスから移籍した小野匠人がいる。パ・リーグは予告先発制であるため、今日のゲームで彼が先発登板することは既に発表されている。

今日のために二人で練ってきた計画の最終確認のため、匠人の携帯へとメールを飛ばす。

『頭から行くぞ』

計画の通りに事が運べば、本柳に死神が訪れるのは１回裏か２回裏のマーベラスの攻撃中になるだろう。

試合前の練習を終え、後攻のマーベラスナインがうぐいす嬢（場内アナウンス）のアナウンスに導かれ、グラウンドに散っていく。

『サード、稲葉晴信。背番号１３』

呼ばれてベンチから飛び出しサードの守備位置へと向かう。

行きがけに、スタンドに向かってチームのマスコット【マーベリックくん】人形を一塁側のスタンドに投げ込むと、大きな歓声が沸き上がった。この歓声を聞くと、自分の人気の高さを改めて認識させられる。そして、同時にどうしても抱いてしまうのだ。今の俺に対する待遇は、あまりにも不当なものなのだという、やり場の無い憤りを。

本柳自身はいい人だ。日本プロ野球界の至宝とまで言われている、今まで彼が培った年棒３４億６千万円級のスキルを遺憾無く他の選手達にもバラ撒いてくれるし、自分のせいで球団が金欠に陥っている事にも薄々感付いているらしく、マメに飯を驕ってくれるし纏まった金も５桁までなら無利息無担保で貸してくれる。

だからといって、この状況をいつまでも堪えている訳にはいかない。この男が元凶である金欠病がチーム内に蔓延している以上、そして、それのせいでかけがえの無いものを三つも纏めて失わされた以上、どうしても報復せずにはいられないのだ。

1回表、ノワールは三人で攻撃を終える。やや後ろめたい気持ちはあるものの、死神召喚までのカウントダウンが始まった。

今日この球場には４万５千人が詰め掛けている。決して少ない人数ではない。客引きがうまくいっていない訳では無いのである。やはり、一人の選手に対してとんでもなく高い給料を出さねばならないという現状が、経営状態を悪化させているのだと断定してもよいだろう。本柳照文は、今の段階で旭川マーベラスに関わる者のほぼ全てを敵に回してしまっていた。

おそらくは、こうなる前に俺じゃない誰かが別な形で決着を着けていなければならなかったのだろう。だが、こうなってしまっては……。今回の騒ぎで俺が失ったものは、我慢するにはあまりにも大きすぎる。

初回、マーベラスの攻撃は1番打者爪蕗から始まっている。予告通り先発登板した匠人は、珍しく立ち上がりの制球が乱れていた。３球続けてボール球となり、その後辛うじてストライクを２つ取ってのフルカウント。典型的な技巧派投手で【ボール半分の魔術師】との通り名を賜る匠人のピッチングである。傍目には絶不調に見えることだろう。

だが、俺にははっきりとこの制球難がわざとであることが判る。俺と匠人との間に取り交わされた密約が明るみに出ないようにするための、いわゆる布石であるということは直ぐに判ったのだ。

結局爪蕗は四球で一塁へ。どうやら匠人はこのイニングで決めるらしい。

漸く終わる。俺の金欠もチームの金欠も、このイニングが終わると同時に、漸く終わる。

2　小野匠人は出来高契約を交わしている

試合前、俺は先輩からメールを受け取った。

『頭から行くぞ』

これは則ち、計画実行の合図。死神召喚のための、魔法陣。

運が良いのか悪いのか、俺には死神を喚び出すような特殊な精神力は備わっていない。だが、運の悪いことに、俺自身が合法的に死神に化けることが出来るのだ。

本来なら、立ち向かっていくべきなのだろう。相手が好選手であればあるほど、それを乗り越えた時の喜びもまた格別なものであり、その状況で達成した出来高契約にこそ、始めて価値が出てくるというもの。

それが解っていてもなお、本柳照文は煙たい存在だったのだ。どうしても打ち取れる気がしないのである。　こんな相手は元沖縄シュバルツの剣持和俊以来だ。とはいえ、この二人は六年間も同じリーグでプレイしていたのだが。

練習を終えたマーベラスが守備に散っていく。1回表ノワールは三者凡退で攻撃終了。今度はノワールが1回裏の守備に向かう。

いよいよ仕事の時間だ。

どうせなら初回で決めたい。こういう汚れ仕事はとっとと片付けるに限る。

『ピッチャー、小野』

三塁側から大声援、一塁側から大ブーイングが巻き起こった。一塁側やライト側のスタンドから物が飛んで来ないのがせめてもの救

いだ。俺のノワール移籍はそれ程後味の悪いものだったのだ。

俺としては、普通のＦＡ移籍だ。それは、マーベラスにとってもノワールにとっても、全く同じことだろう。球団に7年在籍することにすることによって発生したフリーエージェント権（ＦＡ権）を普通に行使し、そして、ノワールが普通にそれに答えただけ。どこからどう見ても、ただのありふれたＦＡ移籍なのである。

だが、とあるスポーツ紙が、これを普通ではないものに仕立て上げてしまったのだ。

正直、参ってしまった。誰が情報をリークしたのか、マーベラスの経営難や給料未払い騒ぎが突然紙面のトップに躍り、そして俺は【その経営方針に嫌気がさして球団と決別するためにＦＡ権を行使したのだ。それは長年世話になってきた球団に対する裏切りに値する】とされてしまったのである。どうしてスポーツ新聞というのは、こうもいい加減な事ばかり書いてくれるのだろうか。

ＦＡ権行使によって自由契約選手（どの球団にも所属していない選手）扱いとなった俺に対し、古巣であるマーベラスが獲得の意志を示さなかったことが、疑惑を更に加速させてしまった。結果として、新聞に書き立てられた通りの評価を世間から下され、マーベラスファンから裏切り者のそしりを受ける羽目になってしまったのである。

悔しいことに、この評判の悪さが祟ってノワールから半ばお荷物扱いされてしまった俺は、

「世間からの信用を取り戻したいなら、結果を出すしかない」

との一言のもとに、最低保証年棒２４０万円に１アウト取るごとに＋２００万円、自責点（自分が出したランナーを帰されて、点を取られるごとに加算される。他人のマウンドを引き継いだとき、前のピッチャーが出したランナーを帰された失点、自分以外のエラーで出したランナーを帰された失点は加算されない）１ごとに－１千万円という無理難題に近い契約を取り交わすことになってしまったのだ。

人間である以上、誰にだって体調が優れないことや、どうしてもモチベーションが上がって来ない日というのが、年に数回有るだろう。それを考えると、こんな出来高契約はとても結べるものではない。

勿論こんな条件を飲むつもりは無かった。他の球団が獲得の意志を示してくれさえすれば、ほぼ無条件でそれに乗るつもりでいたのだ。だが、ノワールからしかオファーが来なかった。だから、こうなってしまったのである。

グダグダとスポーツ新聞を呪いながら、１０球の投球練習を終える。

『１番、セカンド、爪蕗元廉。背番号０』

のアナウンスと共に、爪蕗二塁手が打席に入ってくる。そして、これから始まるのだ。死神召喚の儀式が。

3　小野匠人は死神を召喚する

死神を違和感無く喚び付けるには、ある程度の演技が必要だ。

普段俺は、制球力で勝負する技巧派である。元々は速球で勝負する、本格派だったため、そう呼ばれるまではそれ相応の時間も必要だったが、今の段階で【ボール半分の魔術師】との通り名さえ賜るほどに制球力を高めることが出来たのだ。

だが今日は。このゲームだけは、いつぞやまでの本格派に戻らなくてはならない。このゲームで全神経を集中させてコントロールをつけなければならないボールは、たった一球のみ。全ては、その一球のための布石に過ぎないのである。

爪蕗に対し、わざと制球を乱す。カウントが3ボールナッシングとなったところで、三塁側のスタンドからは痛烈なブーイングが、一塁側からは大歓声が沸き上がる。つくづく理解した。俺はマーベラスファンのみならず、野球ファンから嫌われているのだと。

４球目、５球目とストライクを取ってフルカウントとした上で、一球外して爪蕗を歩かせる。

これでもう、死神が訪れるのはこのイニングだと確定した。２番、３番をどちらもフルカウントからの際どいボール球で凡打に仕留めると、いよいよ仕事の時間がやって来る。

『４番、指名打者、本柳照文。背番号１６』

本柳が打席に入ると同時に、球場全体から地震でも起こったかのような空気の振動を伴って大声援が巻き起こった。

この声援を聞くといかにマーベラスからは嫌われていようと、球界が彼を必要としているのだということ、そして、なぜマーベラス

が金食い虫である彼を切れずにいるのかということを再認識させられる。

準備は万端だ。わざとコントロールを乱し、【今日は制球難ですよ】ということを客席にアピールしてある。いよいよ次の一球だ。このボールのコントロールにさえ全神経を集中すれば、今日の俺の仕事は終わる。

今野球をやっているプレイヤー全てを対象としても、おそらく俺と弟しかいないだろうと思われる半身のワインドアップから、野球人生１６年間の中でも一二を争う渾身の力を込めて、仕事人の一球を投げる。

ボール半分の魔術師によって究極に制球されたそのボールは狙った通り本柳の頭部を目掛けてすっ飛んでいった。

後ろにのけ反って避けようとする本柳。だが、そんな事はお見通しだ。ボールは本柳の動きに合わせて徐々にスライドする。そして、彼のヘルメットを弾き飛ばし、ドスンと左打席の中に落ちた。それに続くように本柳の身体が崩折れる。

バックスクリーンには、１４９ｋｍ／ｈと表示されていた。

球場内に担架が走る。倒れた本柳はそれに担がれ退場、ぶつけた俺も危険投球と見なされ、規定により退場処分となった。

4　匠人と晴信は利害が一致している

白い死神が本柳の側頭部を穿つ。ヘルメットの耳当ては砕け散り、本柳自身も取り落としたバットが転がる後方へと傾いていく。

そして、転がるバットに剥き出しの後頭部を激しく打ち付ける形でグラウンドに沈んだ。

本柳の身体が激しく波打つ。それに呼応するかのように、俺の鼓動も激しさを増していく。

やってしまった。俺は遂に……、やってしまったのだ。

痙攣しているかの如く激しく脈打つ心臓を、大胸筋越しに鷲掴みにしながら、ベンチから左打席へと飛び出す。

球場全体が呆然と押し黙った後、あらゆる場所から悲鳴があがり始めた。大混乱に陥ったマーベリックコロシアムの中にあって、一番始めに職務を遂行したのは言うまでもなく医療団だ。激しく痙攣している本柳にさるぐつわを噛ませ、担架に乗せてグラウンドから姿を消す。

次いで動いたのは、審判団だった。４人がバックネット前に集結し、何やら協議している。そして、俺の横にいた監督に対し臨時代走を出すことを要求、次いで向かった場内放送席からマイクを借り受け、協議の説明を始める。

『退場いたしました本柳選手に代わり、黒金選手を臨時代走とした２アウト一、二塁で試合を再開いたします。また、小野投手は規定により、危険投球につき退場処分といたします』

コロシアムが急速に試合再開へ向けて動き始めた。

『たいへんお待たせ致しました。試合を再開致します。５番、サー

ド、稲葉晴信。背番号１３』

うぐいす嬢がポジションと名前をコールして、俺を打席へと誘う。

ノワールのピッチャーは、匠人から急遽一昨日先発したエース大榎へとスイッチしている。いくら１９８勝をあげている大投手といえども、ろくにウォームアップもしていないのではまともな球も投げられないだろう。

ピッチャーの肩慣らしは、言うなれば車や単車の慣らし運転だ。それもまともに行っていないうちから飛ばしてしまうとどうなるか？　その結果は、俺のスリーランホームランによりマーベラスが３点先制という形となって現れた。

大榎の立ち上がりを衝き、３点という大量点を一挙にあげることが出来たものの、流石はエースである。そこから先はきっちりと封じ、ゲームは３対１、マーベラスがリードというスコアで９回表を迎えていた。攻めるノワールのアウトカウントは、既にもう２つ。打席の石堂を打ち取ればゲームセットという状況だ。

マウンドにはマーベラスのクローザー、ハインリヒ。彼の速球は、レーザービームを通り越して【光子力レーザー砲】とまで云われている。

石堂がその光子力レーザー砲に詰まらされ、ボテボテのファースト前への当たりを放つと、一塁手がそれを拾ってそのままベースを踏んだ。

ゲームセット。

試合後のミーティングで、監督が【とても悲しい】出来事をサラリと言ってのける。

「今夜２０時５３分、本柳選手が息を引き取ったそうだ。彼の死を無駄にしないためにも、今シーズン絶対に日本一で終わらそう！」

明らかに詭弁なのだが、口には出せなかった。

死人が出たゲームの後にしては、みんなサバサバしている。チーム内に動揺の色など全く無く、寧ろ、いつもより晴れやかな面差しで選手達は帰宅の路を行く。

それぞれが、己が構える自宅へと帰っていく中、俺は反対方向へと車を走らせていた。向かう先は、ノワールが宿をとる旭川白雪ホテルだ。

旭川白雪ホテル３２８１号室。そこには男が一人宿泊している。本柳照文に死球をぶつけ、事故死に到らしめた小野匠人だ。エレベーターで３０階に到着すると、匠人の部屋を目指す。

３２８１号室を見付け、インターホンを押した。ドアが開き、その向こうに複雑な顔をした匠人が佇んでいる。

「マジ……、これで良かったんですかね？　まさか死んじまうなんて……。半身不全にでもなってくれりゃいいや程度にしか思ってなかったのに……」

今更弱音を吐いてきた。もう遅い。こうなってしまってはもう遅いのだ。

「取り敢えず約束の金だ。返金は受け付けない」

強引に仕事料５０万円を押し付けてやった。もはや俺達は一蓮托生なのだから、匠人は金で黙らせる必要がある。

「まあ、本柳さんが居なくなってくれたんなら、俺のオプションが赤くなる可能性はその分薄くなったんだし、後味は悪いけど……、よかったんでしょうね」

まだ完全にとは言えないが、多少は気を持ち直してくれたらしい。
「そりゃそうだよ。あいつが居なくなって、俺もおまえもマーベラスも、その支配下登録選手４９人もみんな救われたんだ。八方丸く収まる大団円じゃねえか」
マーベラスの選手達のあのサバサバした表情を思い出す。間違い無く匠人は、多くの人をあの一球で救っているのだ。
「取り敢えずルームサービスでも取りますか……」
まだ落ち着かないのだろう。匠人はそう提案し、直ぐさま内線電話機に向かう。いったいどうしたと言うのだろうか。受話器を手に取った途端に呆気にとられたような表情を浮かべ、受話器を元の位置に帰す。そしてそれを3度繰り返した後、その表情が引き攣り始めた。
明らかに怯えている。零下２０度の世界に放り出されたかのように激しく震え始めた身体が、彼を襲った恐怖の大きさを如実に物語っている。

これは、どう見ても只事ではない。

「どうした!?」
落ちついたかのように見えたのは錯覚だったということなのだろうか。どうしようもなく動揺した匠人は、
「本柳さんが……、本柳さんが……」
と繰り返すのみ。全く話にもならない。
「おまえ、取り敢えず風にでも当たっとけ。しっかり頭冷やしとけ」
設定温度を２０度にしてエアコンを炊き込む。
エアコンを点けると同時に有り得ない騒音を掻き鳴らした。「なんだ!?」と口に出した途端にエアコンからスパークが発生。ボンッという破裂音とともに、燃え上がってしまった。

ショートにより明かりが落ちた部屋を炎が明るく照らす。急いで消火器を探し出し、燃えるエアコンに吹き放つ。

ようやっとの事で火を消し止めた俺の横で匠人は只々震えながら、

「本柳さんが……、本柳さんが……」

と狂ったように繰り返していた。いや、もしかすると、この時既に実際に狂っていたのかもしれない。

5　稲葉晴信は、試合後半にぶつけられそうになる

あれから半年経つ。困ったことに、毎月第三週、【雨　廿】なる者から頻繁に迷惑メールが来るようになった。迷惑メールと言うよりは、寧ろ純粋な応援メールなのだが、問題なのは匿名であること、そして、そのメールが来た日には必ず6回、7回、8回のいずれかに、ぶつけられそうになることだった。

今の所偶然として無視しているのだが、いったい何なのだろうか。同じピッチャーならばわざとであることも充分考えられるのだが、全て違うピッチャーなのだ。

シーズンを終え、いよいよ出来高払いの日がやって来る。昨シーズンの分と今シーズンの分、都合5億5320万円を一気に支給してもらえた。本柳が居なくなった効果はやはりチームとって計り知れないほど大きい。

他の高額契約者も全て満額払ってもらえたらしく、チーム内には【ショート様々だよな】という空気が蔓延している。そして、俺自身匠人にはとても感謝していた。彼がこの凶事に手を染めてくれなかったら、この満額支給はおそらく今年も無かったのだから。

自主トレーニング、キャンプを経て、今年もまた球春がやって来る。今年の開幕戦は昨年3位のノワールだ。

通常開幕投手にはチームのエースを持ってくるものなのだが、大榎がキャンプで椎間板ヘルニアを患ってしまったため、今年は匠人がそのマウンドに上がっている。あれから半年。あの【雨　廿】のメールの日から今まで一度も顔を合わせたことが無かったが、匠人は大丈夫なのだろうか。匠人がなんともないなら、本柳の呪いという線は無くなるのだが。

試合の展開によりイニングは異なるが、今までぶつけられそうになった時間帯というのは、本柳がくたばった２０時５３分という時間に一番近い打席だったのだ。それに加えてホテルでの匠人の怯え様。今まで、僅かながらも本柳の呪い説を完全否定できずにいた。したいのに、できずにいたのである。

だからこそ、どうしてもこのゲームではっきりしておきたい。

おそらくはこのゲームでもぶつけられそうになる筈だ。その時の匠人の反応で、それが俺同様に毎度の事なのか、それとも初めての事なのかがはっきり判るだろう。匠人は実行犯である。誰よりも怨みを買うべき男であり、そんな男が初めて被害に遭ったのならば、一連の危険球騒ぎは偶然であると判断できるのだ。

初回、匠人のピッチングは冴え渡っていた。野球ファンから魔術扱いされている制球力を遺憾無く発揮して、マーベラス打線を手玉に取っている。照明塔８機と球場の壁を取り巻くように設置してある照明器からのカクテルライトに浮かび上がるそのシーンは、さながら投球マジックショーであるかのような感覚さえ覚える。

この分なら、おそらくまだ被害には遭っていないのだろう。匠人が初めてなら、本柳は無関係だ。恐ろしい偶然ではあったが、昨シーズン後半の危険球地獄は単純に運が悪かっただけ。そう判断する

ことにしておこう。

6　小野匠人はマウンドで震えていた

試合は何事も無く7回を終了した。本当に何も無い。両チーム通じてノワール４番の高沢が放ったソロホームランの1本だけ。信じ難い程にヒットすら何も無い。

８回表、マーベラスの攻撃。まだランナーを一人も出していないため、４番の俺から始まる打順だ。開幕戦でパーフェクト。もし達成されたら、いったい史上何度目の大事なのだろうか。

絶対に出てやる！

本柳の事故死によって活力を取り戻した筈のマーベラスが、開幕戦でパーフェクト。そんな事を達成されてしまっては、ファンから【やっぱり本柳が居ないマーベラスはザコだ】というレッテルを張られてしまうことにも成り兼ねない。

せっかく金食い虫から解放されたというのにそれが原因で集客率が落ちたとあっては、本末転倒甚だしい。こんな事態だけは、何があっても阻止しなければならなかった。

バットを携え、打席へと向かう。

『４番、サード、稲葉』

うぐいす嬢のコールが場内に響き渡る。スタンドからの声援を背に、俺は、スタンスをつくった。

そして投じられた匠人の一球目。そのボールは、俺の懸念と匠人の記録達成を同時に打ち砕く。まるで吸い込まれるように、俺の頭へとすっ飛んで来たのだ。

後方に身を引いて避けようとするも、１４０ｋｍ／ｈを越えていたそのボールは、俺の動きに合わせるかのようにスライドしてきた

のだ。いわゆる高速スライダーと呼ばれる変化球だ。
結局避けきれず、ボールは俺の頭頂部を急襲、高く跳ね上がってバックネットにぶつかった。

デッドボール。

テイクワンベースのコールを受け、俺は一塁へと向かう。ボールがぶつかる瞬間本柳の惨劇が脳裏をよぎったが、今回は、不幸中の幸と言うべきなのか、倒れることも無く意識もはっきりしている。
ぶつけた匠人は、マウンドの上でしゃがみ込んで震えている。明らかに【とうとうやっちまった】という感じの行動だった。
今まで何の怪しいそぶりも無くいつも通り淡々と仕事をこなしていた匠人。あの様子からはとてもこの行動は想像できない。いったいどういうことなのか、あとでメールでも打ってみるとしよう。

ここまで快調に飛ばしていたノワール先発の匠人は、俺へのデッドボールが危険投球と見なされ一発退場となった。後を受けた投手は、匠人がパーフェクトピッチングをしていたこともあって、例によってまた肩を作っておらず、結局マーベラス打線に捕まってしまった。その結果、４対１でマーベラスの勝ち。マーベラス戦に限ってノワールは、あらゆる意味で運の無いチームのようだ。

ゲームが終わり、バスが俺達を乗せてホテルへと引き返していく。そのバスの中、俺は一人の男へとメールを飛ばしていた。試合の途中で俺の頭にデッドボールを喰らわせて一発退場となった小野匠人だ。
この返信、このメールに対する匠人からの返信が、これからの俺の運命を大きく左右する。

7　稲葉晴信はスポーツニュースで次第を知る

どうしても気になる。今回の危険球によって【ボール半分の魔術師】から【ビーンボールの魔術師】へと通り名を変えられた匠人は、かれは、確かにあの時場違いな程の過剰反応を示していたのだ。あれはいったいどういう事なのだろう。

【ショート、俺にぶつけた時やたらブルってたけど、あれ何だったんだよ？　もしかしておまえ、いつもぶつけそうになってたりすんのか？】

このメールを作成し、送信してみる。どういう返信が来るのだろうか。とはいえ、ビーンボールの魔術師と呼ばれているぐらいなのだから、あれからも何度かデッドボールやそれに近いボールが多かったのだろうとは思うのだが。

問題なのは、それが内側を意識させるために故意に投げたものなのか、それともなにか超自然的な力によって無理矢理そうさせられた物なのかということの一点に尽きる。少なくとも、今日の一発退場はとても故意に投げたボールとは思えなかった。とてもそうとは思えなかったのである。

微妙に揺れる球団のシャトルバスに心まで揺さぶられながら、只ひたすらにメールの返信が来るのを待った。

結局ホテルに到着するまで返信は来なかった。スーツを脱ぎ捨て、ひとっ風呂浴びてからベッドに飛び込みテレビを点ける。どうにも後味の悪いゲーム。あのゲームに対するマスコミの反応はいったい

どういうものなのだろうか。
『今日のスポーツ、まずはパ・リーグ開幕戦からです』
キャスターの言葉で今日の三試合のダイジェストが始まる。沖縄シュバルツ対東京テンタクルス、松阪ラダマンティス対島原ヴォルガヌスに次いで漸く宇都宮ノワール対旭川マーベラスのダイジェストに入った。
予想通りと言うか何と言うか、白地に黒でＮＯＷＲＥＬ、襟足から黒いラケットライン、肩口と袖が黒い上着に、真っ黒なパンツという、背番号２１番のノワールのホーム用ユニホームが画面で踊っている。
『ノワール開幕投手小野は、７回までをパーフェクトに抑えます』
そう、確かにあの時まではものの見事に押さえ込まれていたのだ。７回までボール半分の出し入れに、マーベラスはいたずらに三振と凡打の山を築いていたのである。
『ですが８回表、稲葉の頭にぶつけてしまいます。このピッチング、どう思われますか、解説の崖布さん』
キャスターが番組の解説者、元ラダマンティスの崖布正之氏に解説をお願いしている。いよいよだ。いよいよあのボールがどういった性質の物なのかはっきりする時が来たのである。

出来ることなら直に匠人から答えてもらいたかったのだが。

『小野くんの終盤での危険球は、昨日今日に始まった話ではないですからねぇ。いつぞや本柳くんを死なせてしまった辺りから、ひじょーにぶつかりそうなビーンボールが出るようになりましたし、事故の事がひじょーに気になるのは解りますが、これに懲りて、ひじょーに気を引き締めてほしいものですね』
崖布節を炸裂させながら一番聞きたくなかった言葉を解説者が言

い放つ。このコメントによって、確定してしまったのだ。匠人もまた、終盤ぶつけそうになっているのだということが。

番組では、相変わらず崖布氏が【ひじょーに】をこれでもかと言わんばかりに頻発させ、ファーストのことを【ホワスト】と言っているが、それに対して突っ込む気力はもう、俺には残されていなかった。

8　稲葉晴信はメールを受け取る

戦慄のスポーツニュースが終わると、それを待っていたかのようなタイミングで匠人からのメール受信を携帯電話が告げた。

取り急ぎ電話機を開き、メールフォームを開く。そこには、スポーツニュースで推理した通りのことが書かれてあった。

『先輩、スポーツニュース見たろ？　要するに崖布さんの言ってた通りっすよ』

やはりぶつけそうになっているらしい。

『本柳さんにくらわした次の月の１８日から１８日が来る度に６、７、８回辺りにぶつけそうになっちゃうんすよ』

《！》

これは盲点だった。確かに俺がぶつけられそうになったのも、１８日だったかもしれない。そして、１８日は本柳が死んだ日なのだ。

『昨日は２８日だったから大丈夫だと思ってたのに……』

０時を過ぎたため、あの事件はもう昨日の出来事である。しかし……、１８と２８。語尾が８ならそれでいいということなのか。

いったい俺達の元でなにが起こっているのだろうか。

『それと、マジ気味悪いんすけと、なんか変なメールが来るようになったんすよ。雨とあとこれなんて読むんだろ？　甘いの真ん中の横線が無いやつ。なんかそいつからいきなりメルアドも教えてないのに。訳解んないよ。恐えよ先輩』

《！》

これもか。この雨甘からのメールまで共通してるのか。このままではまずい。いずれどちらかが死ぬことになるかもしれない。これ

はどう見ても、本柳と無関係とは思えないのだ。
『俺もうどうすりゃいいのか解んねえよ……』
それは俺が聞きたいぐらいだ。どう考えてもお祓いが必要だろう。
間違い無く本柳が絡んでいる。だが、奴の何が絡んでいるのかよく判らない。本柳本人が絡んでいるのか、本柳の顔見知りが絡んでいるのか。どちらなのかによって採るべき対処法が全く変わってくるのだ。
おそらくは本人だ。事件当夜の匠人の対応のしかたや、エアコン炎上事件を踏まえると、どうしてもこの結論に行き着いてしまう。
もうシーズンが始まってしまった。どのタイミングでお祓いに行こうか迷い所である。毎週月曜はほぼ休み。そして、運が良ければ、もう一日ほど、移動日という名の休みがある。本来なら練習に使いたい時間だが、こうなってしまってはしかたがない。一人で行くべきなのか、匠人を伴って行くべきなのか。
いまひとつ判断に迷うところではあるが、取り敢えずは誘ってみることにしよう。
『ショート、俺んとこにも来てんだよ、雨と甘いの線無いやつ。でさ、本柳殺った日エアコン燃えたりしたろ。多分俺ら祟られたんじゃねえかと思うんだよ。
だからさ、一回俺らでお祓いして来ようぜ。な?』
さて、この返事はいったいどうなるのか。とはいえ、普通なら否が応にも行くことになるとは思うが。
ここで問題になるのは本柳だ。果たしてあっさり行かせてくれるだろうか。自分の存亡がかかっているのだ。言わば生命の危機である。どうにかして監視をかい潜らなければならない。明日、匠人と共に計画を詰めることにしよう。

9　稲葉晴信は匠人の自宅謹慎を知る

匠人に対し『お祓いに行こう』メールを送信する。いつもなら直ぐさま『送信完了』のメッセージウィンドーが出てくるのだが、今日のメールはなかなか届かなかった。特に電波状況が悪いわけでも無く、送信が難行する理由もよく解らない。

とうとう『メールは送信できませんでした』というメッセージウィンドーが出てしまった。

《ヤベえなぁ……》

明らかにいつもとは違う何かの力が働いている。

今日の匠人の登板はまず無いだろうが、カードとしてはノワール対マーベラスはまだ、あと二日ある。彼と接触できる機会は残されているのだ。今日か明日、直に会って話してみよう。

……、このタイミングで来てしまった。まるで計ったかのように、このタイミングで来てしまったのだ。【雨　廿】からのメールが。勿論着信拒否にはしてあるのだが、そんなことはお構い無しにサーバーに入ってくる。どうしても普通とは思えない。

『差出人：雨　廿

０：５８

内容

お晩です。

デッドボールの影響は無いですか？

今日もノワール戦ですね。稲葉さんは終盤に危険球を投げられることが多いから、とても心配です。

強打者に対する内各攻めは基本だし、あまり気にせず頑張ってください。

それでは益々のご活躍、期待してます』

何の変哲も無い励ましのお便りだ。これの受信先がマーベラスや

オフィシャルファンクラブのホームページなら全く問題無いのだが……、問題なのは、アドレスを教えていない何者かから、直に俺の携帯に来ているということなのである。

何か手掛かりになりそうなこと……、アンノウンの正体に迫り得る取っ掛かり……。探さなくては。

今日のゲームは対ノワール開幕三連戦の中日だ。退場を喰らった匠人はなぜかベンチにすらその姿は無い。どこに居るのかその所在をノワールの選手に聞いてみることにしよう。

ストレッチを終え、守備練習をしながら匠人の姿を探す。やはり居ないようだ。

守備練習から打撃練習に切り替わった今も、匠人はどこにも居ない。こうなるともう、ベンチから外されているとしか思いようがなかった。

自宅謹慎、出場停止。どちらであったとしても、開幕投手が開幕二日目でこれを喰らってしまうということは、余程目に余るほどの危険投球常習犯なのだということなのだろう。

匠人について聞くチャンスは、早くも初回からやって来る。ノワール、ノーアウト満塁。先発の田中が立ち上がり乱れるのはいつものことだが、今日は幾分酷すぎる。先頭打者から１２球連続ボール球だ。

サードランナーの爪蕗に早速聞いてみる。

「なあ、今日匠人ってどうしたんだ？」

果たして結果は、予想通りの答えが返ってきた。

「ん？　あいつなら、一週間謹慎だよ」

一週間。もう、このカード中には匠人に会えない……。

駄目だ。どうしても最近ゲームに身が入らない。結果は3タコ、スコアのほうも、１４対３とボロ負けしてしまった。

全てが噛み合わない。運が悪い時はこんなものなのだろうか。出来ればセットでお祓いを受けたいところだったのだが、取り敢えずは俺だけで行ってみることにしておこう。

１０　稲葉晴信の携帯電話が砕け散る

このままではいけない。このままでは殺されてしまう。なんとかして俺から本柳を引き放さなければ……。

三月二九日、この日もまたノワール戦だ。匠人は謹慎により今日も欠場している。

内野には砂、外野には天然芝。赤、白、青、黒と色とりどりに彩られた内野席とオレンジ一色の外野席。昨年リーグ2位、宇都宮ノワールの本拠地、宇都宮ベースボールパークの三塁の守備に今俺はついていた。

試合経過は3対2。昨日に比べれば幾分はマシだ。俺のバットは相変わらず湿り気味だが、それでも3打数1安打と、何とか出塁できている。そして、今日の４打席目がやってきた。

『４番、サード、稲葉。背番号１３』

うぐいす嬢のコールに促され、左打席へと入る。そして、そのボールは初球からやってきた。頭部を掠める危険球。昨日は２８日だったが、今日は２９日。昨日のようにぶつかりはしなかったが、８回表、時間にして２０時００分の出来事だ。今までの危険球パターンと特徴が一致するだけに捨て置くことも出来ないだろう。

なにやらとんでもないことになってしまっているような気がする。匠人もいればよかったのだが、いない以上は仕方がない。一刻の猶予も許されなさそうだし、試合終了後すぐにお祓いに行くとしよう。

東京都は世田谷区のかなり奥まった場所にある神社、高谷神社。祭神は毘沙門天だ。その鳥居を前に、俺は足を止める。否、止めてしまった。胸に忍ばせた携帯電話が激しく鳴り響いたのである。身体が竦み上がり、膝が笑う。今俺の携帯電話が着信音を奏でる訳が無いのだ。なぜなら……。

着信設定が【マナーモード】になっているのだから。

俺の携帯電話はなおも激しく俺の嫌いなL'Ａｒｃ-ｅｎ-ＣｉｅｌのＷｉｎｔｅｒ　Ｆｏｌｌが鳴り響いている。勿論俺が設定した着メロではない。する筈がない。嫌いなのだから。だがこうして、実際に鳴っているのだ。

震えながら携帯電話を手に取る。視線は手先を追ってはいない。このような恐ろしいものを見る勇気は、今の俺は持っていなかった。何かに縋るように鳥居に掲げられた【高谷神社】という看板に視線をようやく合わせながら、うちポケットから取り出す。

ラルクファンである俺がこの曲を嫌っている理由は、【本柳が】この曲を入場テーマ曲に使っていたからだ。【坊主憎けりゃ袈裟まで憎い】これが転じて【本柳憎けりゃＷｉｎｔｅｒ　ｆｏｌｌまで憎い】という心境に達してしまったのである。勿論本柳のテーマ曲が一連の騒ぎに無関係であるとはとても考えられない。おそらくデ

ィスプレイには本柳関連の何かが表示されていることだろう。
意を決して視線を携帯電話に合わせ、それを開こうとしたとき、その声が前方から飛んできた。
「駄目です！　その電話を開かないでください！」
鳥居の向こう側から渋い声を放ったその男（俺にはとても女の声には聞こえなかった）は、警告を終えてすぐ、
「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前！」
という呪文を続けた。これは俺でも解る。確か九字だか九印だか言う陰陽や日本神道で使われている業だ。最近ではあまり聞かなくなってしまった気もするが、一昔前には人気漫画【孔雀王】に何度と無く出てきたフレーズであるため、３０代男性にはもはやおなじみの業だろう。
そして、俺が右手に持つＩフォンは、跡形も無く砕け散った。
「済みません、お電話、壊してしまいましたね」
バツが悪そうに頭を掻きながら、頭と口髭がロマンスグレーに染まった神官姿の中年男性が鳥居を潜って姿を現す。
「除霊相談ですね？　お手数ですが、神殿までお越しください」
おそらく高谷神社の神主であるのだろうその男は、俺を神殿へと誘う。

11　稲葉晴信は事件の露見を恐れる

神主の導きによって高谷神社の神殿へと入る。この事件のあらましをいったいどうやってこの神主へと説明すればいいのだろう。まさか、チームの先輩を殺した報いを受けているなんて事は、死んだって言えない。

「さてと、ではまず事情をお伺いします。貴方に憑いてるのはいったいどなたなんですか？　貴方に相当怨みを持ってるようでしたが」

早速来た。事情聴取だ。何とかごまかし切らなければ。さて、どうする。

「実は去年の八月十八日、先輩がデッドボールを受けて亡くなってしまいまして。ご存知ないですかね、旭川マーベラスの本柳選手。実は俺、マーベラスの選手なんですよ。サードの稲葉晴信です」

まずは適当に自己紹介して話をはぐらかす。こんな初期段階から殺しの事を悟られる訳にはいかない。

「ああ！」

突然神主が握り締めた右の拳をポンっと左の掌に乗せるように軽く打ち下ろす。

「どこかで見かけた気はしてたんですが、マーベラスの稲葉選手でしたか。東京テンタクルスで投げてるうちの孫がいつも打ち込んで頂いているようで、忌ま忌ましく思いながら貴方のプレイを拝見させて頂いております」

うーむ、そう来たか。確かにテンタクルスとは相性がいい。だが、あまりにもカモが多いため、誰が彼の孫なのかは、判断できなかった。

「すいませんね、テンタクルス戦は右の軟投派が多いせいか、何故かボールがよく見えるんですよ」

「そうですねえ。私も左打者でしたからよく解りますよ」

「へぇ、経験者でしたか」

うまい具合に話が逸れてくれた。後はそれとなく除霊を依頼する……、

「では、怨霊の正体は本柳選手ということで間違いないですね？」

駄目だった。また話題が戻ってしまった。どうやら事件のごまかしは避けて通れないようだ。

それにしても、まさかこんなに威圧感のある毘沙門像が、寺ではなく神社にあろうとは……。その目は俺の行いの全てを見透かしているかのように怒りの表情を浮かべて睨み付けている。今の俺では、この無生物にすら根負けしてしまいそうだ。

「うちの球団は本柳さんに多額の年棒を払わなきゃいけなくて、経営難だったんですよ。それで給料未払いの選手が出てき始めて。……それにしても神社に毘沙門ってのは珍しいですね」

なんとか話題を逸らせたい。

「毘沙門様も神ですから。それに私、実は仏門の出なんですよ。跡取りがいないということでこっちの母方の神社を継ぐことになりましたが、父方は仏門の家系でして」

あと少しだ。あと少しで完全に話題が変わる。

「では神主さんはお寺の修業をなさってたんですか？」

もう一押しだ。ここで思い出話でもさせてしまえば、もう大丈夫だろう。この神主は意外と乗りやすい性格のようだし多分乗って来るだろう。

「ええ、朝早くからのお掃除に始まり座禅やら何やらと、当時の私にとっては意味不明なことばかりさせられてましたねえ……」

「逃げてやろうとか思わなかったんですか？」

決まった。もうここから先は思い出話に突入する筈だ。

「貴方がお給金を頂けないのにいつまでもマーベラスにいらしたのと同じ事ですよ」

なぬ？　話題が少しUターンしてしまった。

「なるほど、動こうにも身動きが取れなかったんですか」

「稲葉さんは、身動きが取れない人がまず最初に考える事って何だ

と思われます？」
「殺すことですか……ね。縛ってる相手を」

《！》

失言というのは、してしまってから気付くことが多い。これは良くない。絶対に良くない。鋭い者なら今の失言だけでも気付いてしまうだろう。
「そう！　そうなんですよ。私も人並みに『和尚さえ殺しちまえば逃げれるんじゃねえのか』って考えたこともあったんですよ」
苦笑いを浮かべながら神主が語り始めた。助かった。どうやらただのボンクラのようだ。あまつさえ「いやあ、お恥ずかしい」とか言いながらボリボリと頭を掻いている。まさにボンクラだ。
「で、神主さんのおっしゃる通り未払い組で一番給料高かったの俺なんで、本柳さんが勘違いしちゃったみたいで」
ボンクラ神主の与太話にいつまでも付き合っているつもりはない。とっとと話を締めくくる。
「稲葉さん。今のお話が全て真実であると、この毘沙門様に誓えますか？」
突然神主が今までのヘラヘラした態度からは想像も付かないほどの真剣な表情で問うてきた。彼の指し示す方向には毘沙門。相変わらず俺を、断罪するかのような形相で睨み付けている。だが、ここで根負けする訳にはいかない。
「……、……誓えます」
返答にかなり時間がかかってしまった。それほどまでに、この毘沙門の威圧感は物凄かった。
「最後にいいですか？　貴方はこの毘沙門像をご覧になってどういう印象をお持ちになりました？」
神主からの唐突な問いが来た。
「何かを断罪しているような気がしましたね」

ここで騙ってもしかたがない。正直に答えておく。
「あっ！　そういえば電話壊してしまったんでしたね。お詫びに一台差し上げますよ。今なら漏れなく【当宮特製お札ストラップ】が付いてまいります」
そう言って神主は立ち上がり棚へと移動する。そして、契約書と携帯電話を棚から取り出した。
霊感商法かと心配になったが、契約書を見た瞬間その心配は消し飛んだ。その契約書は、大手携帯電話会社の新規登録契約書だったのだ。
「一応法律ですので、免許証と保険証を拝見させて頂きます。勿論タダの携帯ですから型は相当古いですが、貴方ぐらいのお歳なら通話とメールさえ生きていれば問題無いですよね？」
物凄く失礼な事を言われている気がするが、実際にそれさえあれば問題はない。
「ぱけホーダイでお願いします」
一言付け加えておく。
「でも、いいんすか？　勝手にケータイ捌いて」
確か認定を受けないと売買ができないと法律で決まっていた筈だが。
「それでしたらご心配無く。帰り際、鳥居の右側の足の付け根をご覧ください」
肝心な事を忘れていた。これをしてもらわないと意味が無い。
「……除霊は？」
「当宮特製ストラップは、結界発生装置です。いかなる魑魅魍魎、悪霊怨霊も寄せ付けません。ご安心を」
確かに寄り付くことも出来ないのであれば手は出せないだろう。除霊としてはそれで充分だった。
「では、お世話になりました」
深々と頭を下げ、高谷神社を後にした。
それにしても、凄腕ながらボンクラな神主で助かった。もし彼の

洞察力が人並み以上だったなら、ほぼ間違いなく事件が露見していただろう。

考えながら参道を歩いていると、いつの間にか鳥居の下にいた。ふと神主に言われたことを思い出し、鳥居の右足元に目をやると、【〇〇〇〇〇代理店認定】というステッカーか貼られていた。

宮司は怒りに打ち震えている。あの男、稲葉晴信は間違いなく殺人犯なのだ。話を聞いている上でそれははっきりと確信できた。にも拘わらずあの男は逃げおおせようとしている。そんな事には絶対に手は貸さない。

「人殺しは相応の報いを受けろ……」

12　小野匠人は絶好調で試合に臨んでいる

六月十八日。久方振りにノワール戦がやって来る。対ノワール三連戦の初戦である今日は、今期二度目の匠人との対戦だ。前回は七回までパーフェクトに抑え込まれていただけに、チームは今日は五回までに十点取ろうぜと息巻いている。

問題の匠人は、兄がノワールに所属している爪蕗の情報によると、相も変わらず危険球退場の日々を送っているらしい。危険球が出る時間帯もまた、俺と同じく二十時前後だった。俺がお祓いに行った日から今日までずっと匠人との連絡が取れなくなってしまっていただけに、野球一族爪蕗家の存在には大いに助けられている。

予告先発制で既に先発登板が発表されている匠人は昨日の試合でも危険球退場となっていた。どうやら【ビーンボールの魔術師】という通り名がいよいよ板に付いてきたらしい。かく言う俺も、毎日のようにビーンボールとは言わないまでも、のけ反ったり飛んだりして避けなければならいようなブラッシュボールが来るようになり、油断のならない状況だ。勿論それらは全て本柳の死亡時刻である二十時五十三分に最も近い時間帯での出来事である。試合終盤にぶつけそうになるピッチャーと、ぶつけられそうになるバッターとの二度目の直接対決は、いったいどのような結末を迎えるのだろう。まさか俺が死ぬようなことは無いと思うのだが……。

どんなに不安がっていたとしても、プレイボールはやって来る。
本来ならもう、休養を要請してしまいたいぐらい精神的に参ってしまっているし、実際に相応の数字しか残せていないのだが、出来高契約の中に【１４０試合出場】というのが混じっているだけに休む訳にもいかない。パ・リーグの公式戦が１４０試合しか無いのだから。つまりこれは、フル出場せよという出来高契約なのである。
プロ野球の試合には、高校野球でおなじみのホームプレート前での整列や、球審によるプレイボールのコールは無い。したがって、必然的にウグイス嬢ないしスタジアムＤＪによる、
『一回の表、旭川マーベラスの攻撃は、バッティングファースト、ショートストップ、モトヤスー、ツマブーキィ！』
というコールが球審のコールの代役となる。あれ？　この球場、ウグイス嬢じゃなかったっけ？　と思われる方もいらっしゃるかもしれないが、【よりメジャーに近い運営を】との経営方針のもとに、今月からスタジアムＤＪへと場内アナウンスが変更されている。
今日の匠人はいつぞやパーフェクト寸前まで持って行かれたときよりもなお、変化球が切れていた。ベンチから見ていても、目で追うのがやっとである。おそらく打席に立って真正面から見ていると、目で追いきれずに視界から雲隠れしてしまうことだろう。案の定三球三振でベンチに帰ってきた爪蕗から、
「今日のあいつのスライダーとシュート……、消えるわ」
との報告を受けた。
ちなみにノワールにいる爪蕗家長男の名は爪蕗家康。元康の話しによると、父親の人生の師と仰ぐ人物が徳川家康であるらしく彼が歴代に名乗った名前を息子達に順繰り付けていったらしい。元康に弟が出来たら本気で【爪蕗竹千代】にしようとしていたというから、三人目が女の子だったことに心から安堵したという。名付け親である父親の名は広忠。どうやら爪蕗家は爺さんの代から既に松平（後・徳川）家がお気に入りらしい。
そんなことを考えているうちに、二番打者小関の打席が終了、

「やたら速え球来たからストレートのタイミングで振ったら、フォークかスプリットかなんかだった」

との報告をベンチにもたらす。匠人にスプリットが投げれるなんて話は聞いたことが無いため、恐らくはフォークなのだろう。どうやら今日の匠人はフォークも消せるらしい。そして、フォークがストレートと勘違いするほど速いということは、ストレートもまたいつも以上に速いということを意味しているのだ。

『バッティングサード、ライトフィールダー、ヒデヨリー、クロガーネェ！』

スタジアムＤＪが三番打者の黒金を打席へと誘う。その黒金も、三球三振でベンチへと帰ってきた。

「あいつのストレート、俺のバットの三センチ上行った……」

ワールドベースボールクラシックの日本代表にも選ばれた程の男に、ストレートの三センチも下を振らせて三球三振に切って取る。今日の匠人は神憑り的に絶好調らしい。

１３　稲葉晴信はスライダーを見失う

宇都宮ノワールの本拠地、宇都宮ベースボールパークにボール半分のマジックショーが炸裂する。かつて【ボール半分の魔術師】と呼ばれた男の絶好調の投球に、俺達はマジックショーのアシスタントと化し、いたずらに三振の山を築くのみ。ボールにバットを掠めたことすら、三番打者黒金がようやっとの思いで記録したキャッチャーへのファールチップ一つだけというていたらくだ。

おそらくは八回辺りに俺にぶつけて退場するのであろうが、さすがにこうも危険球退場を頻発させている匠人がマウンドにいるとなると、ノワールとしてももうリリーフの準備をしないということも無いだろう。今日のゲーム、場合によってはノーヒットノーラン負けの可能性も出てきてしまった。

『バッティングフォース、サードベースマン、ハルノブー、イナーバァ！』

時刻は七時二十三分。おそらくは今日の俺の最終打席となるだろう八回表のコールを受ける。

無意識のうちに手足が震え始める。本能的にこの先に待ち受けているであろう己の運命を身体が察知しているのだろうか、俺自身は少しも怯えていないというのに意に反して手足の震えは止まらない。

バッターボックスに入り、バットを構える。今日のゲームで本人最速となる１５２キロを記録したばかりの匠人が投げた初球は、真ん中やや外寄りの位置に飛んできた。このコースならおそらくはシ

ュートかシンカーか、外側に逃げていく変化球なことは確かだろう。もし仮に向かってきたとしても、俺にぶつかる可能性は１００％無い。

ボールについていけている訳ではないが、シュートに狙いを絞る。ついていけていようがいまいが、とにかくとっとと出塁するなり凡退するなりしなければぶつけられてしまうのだ。

《見えた！》

予めシュートに絞っていたからなのだろうか、ボールが気持ち程度沈みながら外側に逃げて行くのをしっかりと視野に捉えることが出来た。ここまで見えたのなら後は、振り出しのタイミングさえ誤らなければミート出来ない俺ではない。

曲がる変化球はギリギリまで引き付けてから振り出さなければならない。そうしないとたいていボテボテの内野ゴロとなってしまう。いわゆる【引っ掛けた】とか【当てただけ】というやつである。実況アナがこの表現を使う当たりが飛んだときは、九割方ボールを最後まで見ていなかったことが原因だ。

だが、本能的なところで焦っていたのだろうか、それが解っていてもなお、早めに手を出してしまった。その結果、当てただけというより、寧ろ【当てるのがやっと】というような当たりとなり、打球は三塁側のベンチを急襲した。

ファールボール。

たかだか当て損ねのファール一つで一塁側のスタンドからはどよめきが、三塁側のスタンドからは大歓声が巻き起こる。

勝負続行。

二球目は内側にやたらと速い球が来た。頭の中が真っ白になり、自然とバットを後方に投げ捨て頭を抱えて後ろにのけ反る。だが、球審のジャッジは「ットライ、ツー！」というものだった。駄目だ。どうしてもこの時間帯の内側の速球には過剰に反応してしまう。ス

トライクゾーンに来た球にすらこの有様だ。

三球目。ガクガクと笑う膝に強引に力を加えながら、ようやっとの思いでバットを回収してスタンスをとる。

今度は外側に速球が来た。ここに来て初回に小関が報告してくれた【やたら速え球来たからストレートのタイミングで振ったら、フォークかスプリットかなんかだった】という言葉を思い出す。

いったいどちらなのだろうか。

フォークは落ちてから掬い上げるより、落ち始め或いは落ちる前を叩くのが基本だ。取り敢えずストレート打ちの基本である球離れから【一、二、三】のタイミングから一歩遅らせた【一、二の、三】のタイミングで振ってみよう。今だいたい一辺りだから……、

《二の、三！》

フルスイング。

どうやらストレートだったらしく、タイミングを遅らせた分だけ振り遅れてしまった。やたらと大きな打球がレフト側のスタンドへと飛び、そのまま場外へと消える。

ファールボール。

振り遅れの打球に、三塁側やレフト側からのみならず、ノワールファンが陣取っている筈の一塁側やライト側のスタンドからも拍手喝采が巻き起こった。

この後十五球粘った後でそのボールはやって来た。

勝負に夢中になって、忘れてしまっていた球。

今までの試合で最も注意し、警戒していた球。

そう、飛んだりのけ反ったりしなければ避け切れない内各球、いわゆるブラッシュボールである。内側に速い球が来たのは解ってい

た。だがこの時はボールに対する恐怖感は全く感じず、逆にパーフェクトだけは阻止しなければという義務感のようなものが勝っていたため、この時間帯の内各球はほぼ間違いなくぶつかるという不文律が俺の頭の中からすっぽりと抜け落ちてしまっていたのだ。

先程のストレートとほぼ同じスピードで入ってきた球を、ストレートであると断定してスイングしようと右足を踏み出した瞬間、そのボールは視界から消えてしまう。

初回に爪蕗がもたらした【あいつのシュートとスライダーは消える】という報告を思い出す。シュートならばもっと外側に投げてくる筈。実際初球はもっと真ん中寄りだった。ということは……。

《スライダーか！》

気付いた時はもう既にボールがスライドして視界から完全に消え失せた後である。どう考えてもこの間違いなく俺にぶつかるだろうスライダーを避ける術は残されてはいなかった。

苦し紛れにバットを投げ捨て、後ろにのけ反る。だが、ボールは予想通りに惰性で前に出てきた俺の右手を直撃、指の骨をへし折ってしまった。

監督が臨時代走を告げ俺は近くの救急病院に搬送されることになる。

１４　稲葉晴信は選手名鑑で【廿】を発見する

高谷神社でのお祓いは正直なところ疑わざるを得ない。勝手に本物だと思い込んでしまったが、どうやらあの神主は性格同様実力も盆暗らしい。　近くの救急病院に担ぎ込まれた俺は、匠人のスライダーに砕かれてしまった右手の治療に入る。治療に入ったとはいっても忙しいのは整形外科医であり、俺自身は痛みを堪える以外に特にすることも無い。

することが無いならすることを作ってみよう。痛みが妨げにはなるが、この騒ぎの元凶であると思われる【雨　廿】について考えてみる。

前から微妙にアンテナに引っ掛かるワードがあった。【お晩です】【しばれる】等に代表される方言っぽい言い回し。

練馬区から旭川に引っ越して来て一番始めにぶち当たってしまった壁だった。

言葉の壁。

まさにストライクど真ん中だ。ご当地にいるからこそ断言できる。これらは北海道弁なのだ。つまり、雨廿は北海道民なのである。もし違ったとしても、少なくとも住んでいたことがあることは確かだろう。

本柳がどこの出身だったか思い出してみる。……、駄目だ、いまひとつはっきりと思い出せない。大阪、広島、北海道のどれかだとは思うのだが……。

ただ、住んでいたことがあるという条件に当て嵌まることだけは確かだ。何せ旭川マーベラスの選手なのだから。プロ野球選手というのは、基本的に所属球団の所在地に住居を構えるものなのである。

麻酔が効いているため、右手に痛みは感じない。どうしてもこの

暇な時間に雨廿の正体を暴いてしまいたかったが、【廿】の読み方が解らない以上、もうどうにも出来なかった。後はただ、手術の終了を待つのみだ。

手術が終了し病室に搬送される。どうやら綺麗にポッキリと指が折れていたらしく、選手生命にはなんら支障は無いらしい。リハビリも含めて復帰まで一ヶ月半。順調に回復すれば、八月初め辺りには復帰できそうだ。これによって出来高契約の一つが達成不可能となってしまったのは痛いが、逆に言えば身の危険を感じる試合を回避することが出来るようになったのである。これはこれで良かったのかもしれない。

やることが無く暇なため、何の気無しに手荷物を漁ってみると、今年のプロ野球選手名鑑が出てきたのでめくってみる。

その名鑑には出身校ベスト１０なる特集が組まれている。高校上がりの俺は、高校の特集に目を通した。

十位、日大川崎

高谷義弘（東京テンタクルス）

「こいつかぁ、あの盆暗神主の孫！」

ほぼ間違いない。言われてみれば、確かに俺がさんざっぱら打ち込んでいるピッチャーだ。インチキお祓いの腹いせに、これからも容赦無く打ち込んでやることにしよう。世の中全て因果応報だ。

さすがは数多ある高校の中でもプロ野球選手輩出数十位の学校である。こいつ以外はそうそうたるメンバーが並んでいた。

九位、専大玉野
大榎貴志（宇都宮ノワール）
ここはここ数年の間で急上昇してきた学校だ。大榎の活躍に影響された若い世代のピッチャー達が彼にあやかろうとこぞって入学して来るようになったらしい。まさに大榎様々だ。校長も北東に足を向けて眠れないことだろう。だが、ピッチャーしか育たないという弊害が出てしまったようだ。
八位、首里学園
爪蕗元康（旭川マーベラス）
出た、名門中の名門である。この順位にあるのを見てもさすが名門だという感想ではなく、【えっ、こんなに下なの！？】と思ってしまうほどの、甲子園の朝青龍だ。
十年連続選手権大会（夏の甲子園）出場、六期連続（夏春夏春夏春）甲子園優勝等の奇跡的な記録を残し、現在も更新中だ。
ただ、元康いわく、
「俺はオススメしないね、全寮制だし男子校だし。野球が恋人って男子以外は絶対やってられんわ。発狂するぞ」
とのこと。それほど野球三昧の日々であり、出会いや自由な時間など求めるべくも無いということなのだろう。俺にはとても無理だ。
七位、五稜郭学院
森本政宗（浜松スチュパリデス）
意外にもと言っては悪いが、もうこんなに出しているとは思わなかった。ここはまだ、開校してから六年しか経っていないのだ。最近やたら出身選手が増えてきたなぁとは思っていたが、まさか首学を抑えてこんなところにいたとは……。まさに新進気鋭である。ちなみに甲子園出場は春夏合わせて二回しかない。隠れた逸材の宝庫なのだろう。
六位、廿日市実践学院　黒金秀頼（旭川マーベラス）
《！》

【廿】だ。まさかこんなに身近に廿について知るためのキーパーソンがいたとは……。黒金の出身校など気にしたこともなかったが、これはもう、聞いてみるしかないだろう。右手が折れているのも気に留めず、右手に体重をかけてベッドから飛び降りる。つくづく思った。

《麻酔効いてて良かったー！》

と。

売店でテレホンカードを買い、黒金へと電話を入れる。コールが一回、二回と続いていく。とうとう十コール目を数えたがまだ出てこない。試合が終わって呑んで歩いているのだろうか。

十八コールを数えた時、漸くその電話の主は通話ボタンを押してくれた。

『むぉしむぉーっすぃ！　黒金れふゆぉー！　ガハハハハハ！』

やはり呑んだくれていたらしい。全く呂律が回っていない。さらに意味不明な爆笑が続いている。笑い上戸なのだろうか。こんな滑舌の黒金に、【廿】のちゃんとした読みを教えてもらえるかどうかは甚だ疑問だが、取り敢えず聞いてみる。

「あのさ、今年の選手名鑑見てたらおまえの出身校、甘いの真ん中の横線無いやつに日曜の日に市場の市の実践学院って書いてあったんだけど、あれなんて読むのかな？　気になってしょうがねえんだ」

「はふはいひれふよぉー、ガハハハハハハハ！」

……、駄目だこりゃ……、全く解らん。こんなザマで明日の試合は大丈夫なのだろうか。とても心配だ。どうやら今日はもう、甘の正式な発音は望めそうもない。なるだけ早く解決したい問題ではあるのだが、残念ながら明日以降に持ち超さざるを得ないだろう。

１５　稲葉晴信は【廿】の正式な読み方を知る

一日が開ける。漸くだ。漸く今日、【廿】の読み方を知ることができる。時刻は十時二十分強。もう素振りなり何なり、今日の試合に向けた調整を行っていることだろう。

病室からホールへと移動し公衆電話を見付けた俺は、早速黒金へと電話をかけた。

昨日は相当呑んだくれていたようだがうまく酒が抜けているのだろうか。そんな心配をしていたのだが、黒金は僅か三コールで電話に出てくれた。

『おはようございます、黒金です。昨日はすいません、あんなザマで』

どうやら酒は完全に抜けたようだ。あぶさん並の酒豪らしい。

『えーと、俺の出身校ですよね？　あれは【はつかいちじっせんがくいん】って読むんですよ』

と、明快な滑舌で教えてくれた。

「はつか？　はつかって十九日、二十日、二十一日の二十日か？」

もしあれが日付を表すものであるなら、他の都市名にも四日市とか、八日市とか、八日市場とかいろいろある。もしこれらと同列ならば、日の左にある【廿】は、【にじゅう】と読むことになるのだろうか。

『さぁ、知りません。俺だってたまたま廿日市市民だっただけですから、そこまでは知りませんよ。実際住んでなきゃ俺だって読めなかったろうし』

どうやら本人も解らないらしい。

「解ったよ、ありがとう。試合頑張ってな」

『もういいんすか？　先輩こそ早く復帰してくださいよ、本柳さん亡き後うちのヒーローなんだから。じゃあ、お大事に』

公衆電話からツー、ツーという音が聞こえてくる。その音に促さ

れ、俺も受話器を置いた。

一仕事終わったが、このままじっとしている訳にもいかない。廿日市で【はつかいち】と読むことが解ったのならば、次なる仕事は【廿】単体で何と読むのかの割り出しだ。病室に帰って電源の入っていない携帯電話と煙草を手に取ると、そのままホールへと踵を反す。

今度はホールを突っ切って玄関から外に出る。玄関のすぐ脇に、健康促進法によって屋外へと締め出されてしまった灰皿の前に陣取ると、煙草に火を点した後携帯電話の電源を入れてからメール作成ページを開く。

別に、誰かにメールを打とうとしている訳ではない。単純に【にじゅう】と入力して【廿】に変換できるかどうかを確かめたいのだ。

紫煙を燻らせながらにじゅうと入力する。それから、方向キーの下を押した。

煙草の灰がタイルに落ちる。たいした時間は経っていないと思っていたが、どうやら三分近く経っていたらしい。

液晶画面には、たいした量ではなかったが、ありとあらゆる【にじゅう】が並んでいる。その、一番最後にある漢字は……、

【廿】だった。

【廿】の読みが【にじゅう】であることは、これによって判明した。残る仕事は、【雨廿】がいったい何者であるかの割り出しだけである。【雨】は雨だろう。それ以外の何物でもない筈だ。となると、やはりキーとなるのは【廿】だった。

16　【雨廿】と【本柳】が結び付く

病院から退院し、リハビリ生活中にチームの連中が見舞に来てくれた。もうめどが立ち、一週間後に復帰できるという状況下での連中の襲来に、

《おめーらただ騒ぎに来ただけだろ……》

という感がどうしても拭えない。まあ、あれからずっとビジター（野球ではアウェーのことをビジターという）戦ばかりで、ようやっと今週からホームに戻ってきたという事情があったのだということは、解っているつもりなのだが。

「しゅぇんぷぁーい、とっぱやりましょーよぉ、とっぱ！　ガハハハハハハ！」

とっぱとは花札のことである。すっかり酔っ払ってしまった黒金以下数名の後輩達が俺に花札を勧めてきたのだ。ちなみにこの【とっぱ】というのが、ゲームの名称なのか、北海道弁の花札なのかは俺には解らない。

まだ返事もしていないのに、俺の分まで勝手に配り始めてしまった。

「俺右手使えねえんだからカード持てねえって！」

雨廿について考えていたい俺は、なにかと理由を付けて断ろうと試みるが、

「らりいっれんふか、りはばりっしゅよ、りーはーびーり！　ガハハハハハハ！」

と、一向に聞いてくれる気配が無い。もう少し怪我人を労ってほしいものである。

かくして俺も、とっぱに混じることになってしまったのである。

配られ終わった手札を見て俺は愕然とする。どうにもこうにもイカサマとしか思えないような手札だった。一点も無いのだ。ものの見事に一点も無いのである。

「だーっ、おめーらイカサマしてんじゃねーぞ！　なんなんだよこのカスばっかの手札は！」

「それはごしゅーしょーしゃまれふ。ガハハハハハハハ！」

黒金が大仰に手を合わせて頭を下げた後、例によって腹を抱えて笑い転げた。つくづく思う。

《黒金ってマジ酒癖悪いなぁ……》

と。

結局イカサマだと主張する俺の意見は却下され、配り直し無しで続行ということになってしまったようだ。雨、桜、梅、菖蒲、盆図とほとんどの絵柄の零点札が揃った手札を憎々し気に睨み付けているうち、あることに気が付いた。

「……、雨の……、札に描かれてある木って……、シダレヤナギ……、か？」

「しょーれふゆぉー、ガハハハハハ！」

爆笑モードに突入している黒金の言うことなど、少しもあてにならない。

「おーい、誰かぁ！　花札の雨の札に描いてある木って何だか解るやついるかぁ！？」

大声を張り上げ、座に加わっていなかった連中にも聞いてみる。

「あれはシダレヤナギだぞー！」

という声が元康から返ってきた。どうやら間違い無いようだ。初めて【雨廿】と【本柳】が絡んだ瞬間だった。

雨が花札の雨に描かれている枝垂柳を指すのであれば、甘はおそらく二十点札を指しているのだろう。あれはどういう札だったか……。

「誰か雨の二十点、持ってるやついるか？」

とにかく一度、直に見てみたい。そうすることによっておそらく雨甘がなにを目論んであのメールを出しているのかはっきりするのだ。

「にゃにいっへんれふか！　ほんにゃほんみへへふわへにゃいらにゃいれふか！　ガハ、ガハ、ガハハハハハハハ！」

どうやら黒金が持っているらしい。

「もうクロが持ってるってバレバレなんだから、見せてくれてもいいだろー」

まあ、酒が入って頑固&強引大魔王と化した黒金にこんなことを言っても無駄だろうとは思うのだが。

「らーめれーふよーら！」

本当に酒癖の悪い男だ。ここはもうやむを得ない。この勝負はフけ狙いに走って、次の勝負にもっといい手札&雨の二十点札を期待するとしよう。

17　稲葉晴信は本柳の真意を推察する

最初のゲームはものの見事に零点を達成、フけることに成功した（花札は総合点が二十点以下だとゲーム自体を無効にすることができる）。次のゲームの手札が黒金によって非常にテキパキと配られていく。

配られ終えた手札の中には念願の雨の二十点札は無い。非常に残念だ。

「誰か雨の二十持ってるやつ居るか？」

取り敢えず聞いてみたが、何の反応も無い。どうやら山の中に混じっているようだ。

「じゃあ、俺からいくぞ」

取り敢えず宣言して、適当に手札を一枚切る。

《さあ、俺にまだ運があるなら雨の二十を引いてみせろ！》

場の空気を念で威圧しながら山から一番上の一枚を引く。

確かにそれは雨札だった。だが、枝垂柳の枝の中に赤い短冊。五点札である。

「あーっくそ！　ビミョーだなぁ！」

俺のこの言葉を俺の思っている通りの意味に解釈できる者は、おそらくこの場には居ないだろう。まあ、居たら居たで危ない橋を渡らなければならなくなるのだが。

まだ雨の二十点札は場に出てきていない。山の枚数も残り四枚。後一周でゲームセットという状況まで進んでいた。この段階まで山の中に目的の札を引っ込めておくとは、運命の女神とやらはどうもドSなお方らしい。

まずは俺から最後の手札を切って山の一番上を引く。これが雨の二十点札でなければ、もう俺にそれが回ってくる可能性はゼロである。出来ることならじっくりと観察したい。

《来い！！》

有りったけの気力を込めて目的の札が来るように念じ倒す。

それから引いた札に俺の願いは……、

通じてはくれなかった。

またしても、枝垂柳に赤短冊。五点札である。

後輩達が次々と手順を終了させる。最後の黒金が一連の作業を終えた時、漸くそれは姿を現した。枝垂柳の街路樹の下、傘をさしたおっさんが佇んでいる。そのすぐ目の前には橋。武道館やタージ・マハールを彷彿させる玉葱型の欄干の赤い橋が架かっている。その下に流れているだろう川は、札には描かれていなかった。

これはいったい何を示しているのだろうか。【枝垂柳の下にいるから本柳】そんな単純な話でもないような気がするのだが……。

あのオッサンが本柳だとするならば、傘をさしていることに意味があるのだろうか。それとも、橋、或は川を渡ろうとしていることに意味があるのだろうか。

傘に意味を求めるならば、降り注ぐ何かを回避しようとしているということになるだろう。向かってくるボールだろうか。いや、違う。少なくとも傘ごときでどうにか出来る代物ではない。あまりにも場違い過ぎる。

橋か川なのだろうか。もしあの川が三途の川なのだとすれば……。

【俺はまだ、あの世に逝っちゃいねえぞ。おまえらを道連れにしてえからなぁ】

これか？　奴はこれが言いたいのか？

あの高谷神社特製ストラップ付き携帯を貰ってからというもの、相変わらず危険球は来るものの、本柳（雨廿）からのメールは来なくなっている。確かに直接俺に手を出せない状況になっていると言えばなっているのだ。だが、おそらくいつか俺に死を与えるだろうあの危険球を抑えてくれないことには意味が無いのだ。どうにかして戦える状況を作らなければ……。

取り敢えず明日、携帯の契約書に書かれてあった取扱店（高谷神社）に電話してみることにしよう。

こういう結論を出し、俺は花札に意識を戻すことにした。

18　稲葉晴信は宮司に懇願する

マーベラスサイクロンが走り抜け、恐ろしいほど静かな朝を迎えた。神社の営業時間とはいったい何時からなのだろうか。時計を見ると、午前八時十八分。この時間は神社にとって早い時間なのだろうか。

迷っていてもしかたがない。元はといえばあの神主がくれたお札ストラップの効果が不完全なことがこの電話の原因なのだし、今は一分一秒でも惜しい。

今すぐ電話してみよう。

携帯電話の契約書を見ながら、そこに書かれてある取扱店の番号をプッシュする。

一回。

二回。

三回。

四回。

コール音が鳴る度に心拍数が増していく。あの神主、盆暗なわりに妙に鋭いところがあるのだ。できればあれっきり関わり合いたくなかったのだが……。

コール音が十七回目を数えたとき、漸く神社側の電話機から受話器が外れた。

『もしもし、こちら〇〇〇〇〇ショップ高谷神社支店でございます』

対応に時間がかかったわりには、受け答えに寝ぼけた響きはない。

「境内のお掃除中にすいません。いつぞやお世話になった旭川マーベラスの稲葉です」

『いえいえ、真夜中と朝っぱらは寝ぼけてますが、お電話は二十四時間受け付けておりますよ。で、どうです？　本柳さんからメール来なくなったでしょ？』

やはりそうだったか。この神主は危険球ではなく、メールを封印しようとしていたのだ。それならば彼の腕前は百パーセント信頼していい。

「いや、あのですね、……危険球……って解りますよね？　お孫さんプロ野球選手ですし」

『頭に飛んでくるボールですよね。それが何か？』

「その危険球がですね、メールとワンセットなんですよ。本柳さんからメールが来た日の試合、必ず来るんです。そっちの方も何とかならないですか」

神主や僧侶の力が物理攻撃にまで対応できるかどうかは定かではないが、このままではまともな精神状態で打席に立つことも出来ない。

『申し訳ありません、私どもの力が及ぶのは人ならざる者に対してのみです。物理的なものに対しては全く無力ですから、危険球は頑張って自力で避けてください』

どうやら駄目なようだ。自力で避けろと言われても、その危険球は避ける動きに伴ってシュートするなりスライドするなりして曲がってくるのである。

「避けても曲がってくるんすよ、狙いすましたように」

『うーん、どうなんでしょう。野球は基本的に外勝負ですから、内側にも投げなきゃいけない訳ですし。そういうボールがたまたますっぽ抜けてるだけかもしれませんし』

それならどれほど気が楽になるだろう。だが、その可能性はほぼ零に等しいのだ。

「左投手のすっぽ抜けがシュートしてくるのはまだ解ります。でも、右投手のすっぽ抜けがスライドしてくる可能性がどれだけあるっていうんです？」

そう、スライダーとは、投げようとしなければ絶対に投げることができない変化球なのである。ナチュラルスライドも絶対に無いとは言いきれないのかもしれないが、その曲がり幅はせいぜいカット

ボール程度の幅であり、少なくとも、避けている打者の頭部に直撃するほどの変化はしない筈なのだ。

どう考えても始めから頭部を狙い、避けられることを見越して意識的にスライドさせているようにしか思えなかった。

『ナチュラルスライドですか……。まあ、カットボール程度には曲がるんでしょうけど……。確かにのけ反って避けてる人の頭にぶつかるほどのスライド回転は……、かけようとしないとかかりませんね』

神主も同じ結論に達したようだ。

『事情はよく解りましたが、残念ながら私の力は物理攻撃には及びません。先程も申しました通り、危険球はあなたご自身で何とか避けてください。のけ反って避けずにしゃがみ込んで避けるのも、見てくれは悪いですがスライド対策にはなるかもしれませんよ』

《！》

それは考えもしなかった。おそらくこの神主はもう現役を離れているからこそこの考え方ができたのだろう。

野球で体にぶつかったピッチャーの投球がデッドボールであるとの判定を受けるには【ちゃんと避けていた】との審判の判断が必要で、試合でよく見られる大袈裟なジャンプ避けやふん反り避けは、審判に対する【俺はちゃんと避けてますよ】というアピールなのである。

危険球が来た場合、現役選手でしかも連続試合出塁が出来高契約に含まれている俺は、確実にデッドボールの判定をもらうためどうしても大袈裟にふん反って避けることを考えてしまう。それは、どうしても打者の頭にぶつけたい投手にとっても同じことで、避けるならふん反るだろうと思い込んでいるからこそ、シュートなりスラ

イダーなり、横の変化球を投げてくるのだ。本柳にぶつけたときの匠人がその典型例といえるだろう。

のけ反らないで、その場にしゃがみ込む。そうした場合、それこそ意識しなければ百パーセント投げることができない落ちる変化球でなければ絶対にぶつからないのだ。危険球対策としてはそれで充分すぎることだった。

「ありがとうございました。復帰戦で、早速試してみます」

『そうそう、いつ復帰なさるのですか？』

「どうもですねえ……、八月十八日、本柳さんの命日になりそうなんですよ……」

正直今から嫌な予感はしている。奴の一周忌。ただで終わる筈もない。

『復帰を一日延ばして、その日は素直に本柳外野手に謝罪に行ったほうが……、いいと思うのですが……』

《！》

【謝罪】。神主からこの言葉が出てくるとは正直思わなかった。罪を謝ることは、罪を犯した者にしかできない。本柳に対する罪、それは紛れも無く……、【殺害】。

この神主、気付いているのか？

「いや、謝罪って……、本柳さんを死なせたのはノワールの小野君だし……、それにしたって仕事上の事故なんですから……。俺は当然として、小野君にだって何の罪もありませんよ……。やだなぁも

う」

つい、取り繕ってしまった。表面上は落ち着いているように聞こえる筈だが……、彼はこの返答から何かを感じ取ってしまうのだろうか。

最初は彼を盆暗だと思っていたが、いやいやどうして、もしかするとシャーロック・ホームズなみの洞察力があるのかもしれない。

『そうですか。どうやら私の勘繰り過ぎだったようですね。では、復帰戦、カードはノワールのようですし、小野投手が出てきたら危険球にはくれぐれもご注意なさってくださいね。では、失礼します』

神主は、そう締めくくり、受話器を置いた。

彼は気付いている？

気付いている上で俺に協力している？

そうか、【殺すことを考えますね】か。あの失言によって見抜いてしまったということなのか。だが、確証は無い。それにもし、神主の証言によって警察の手が匠人にまで延びてきたとしても、殺すつもりなんてありませんでしたと言い張れば、必ず拘留期限まで粘り通せる筈だ。

殺人罪を立件するには、殺意の証明が必要なのである。見た目としては完璧に仕事上の不幸な事故なのだから、ぶっちゃけた話、警察の出てくる幕ではない。

「大丈夫、心配無い」

胸に手を押し当て、必死に自分に言い聞かせながら、通信が切れたことを知らせる電子音を吐き出す受話器を電話機に戻した。

１９　宮司は本柳に事情聴取の夜の真相を語る

今私の下には、件の本柳氏が降臨している。稲葉晴信に対し結界発生装置を与えた私に、障って来ようとしたのである。

だが、前にも述べた通り私には稲葉晴信をただで済まそうなどというつもりは、毛の先程も無い。だから、間髪を入れずに本柳氏に対して共闘を申し入れたのだ。

稲葉晴信はいつぞや右手の指を骨折し、戦列を離れていると聞く。ちなみに、このデッドボールと本柳氏は全くの無関係である。

おそらくあのストラップに文句を付けてくるなら、今が頃合いだろう。私は本柳氏をすぐ横に待機させ、稲葉からの電話を待った。

「申し訳ありません、本柳さん。私としても貴方が殺されてしまったのだということには気付いているのですが……」

「いえいえ、構いませんよ。あのストラップ、ビーンボールには効かないようですし」

本柳氏はあまり気にしていないようだが、彼が許してくれたとしても、私自身が、たとえ形だけであったとしても殺人犯がのうのうと生きていくための手助けをしているということを許すことができない。

だからどうしても、どんな形であってもいいから早くこの件に決着が付いてほしかった。

「神主さん、なんで解ったんですか？　あいつが噛んでるって。ぶつけたのは匠人なんだから、傍目には無関係なようにしか見えないと思うんですが……」

突然本柳氏が話題を振ってきた。

「簡単な話ですよ。貴方が彼に取り憑いていたからです。まぁ貴方が無差別に人を祟る大悪霊だというなら話は別になりますが」

「でも……、あいつの言った通り私の勘違いかもしれないじゃないですか」

当然稲葉と初めて会ったときにはそれも疑っていた。小野投手のＦＡ報道の時点でもう既にマーベラスの未払い騒ぎが紙面に踊っていたのである。稲葉の給料【二百四十万円プラス出来高契約二億二千万円】という額が未払いになっているだろうことは、軽く想像がつくのだ。部外者の私が解るようなことを、渦中の本柳氏に解らない訳が無い。

となれば本能寺の変の黒幕は羽柴秀吉説に近いようなことを本柳氏が考えてしまうことも、充分考慮に入れたうえで、慎重に対応しなければならない。

だが……。

あのときの事情聴取のほぼ全てに於ける彼の言動が、彼が黒幕であることを如実に物語っていたのだ。

「仮に、貴方がまだ生きていらして、謂れの無いことで悪霊に取り殺されそうになって、私のもとへお祓いにいらしたとします」

「はっ！？　何の話ですか！？」

本柳氏は目を剥いて問い掛けてきた。確かに傍耳には全く脈絡が無いように聞こえるだろう。だが、違うのだ。ここが、私が稲葉を黒幕であると疑い始めた取っ掛かりなのである。

「強いて言うなら犯罪心理学の話です。続けてよろしいですか？」

「はぁ、まあ……、構いませんが……」

「もし、貴方のお話を聞いているうちに私が『あぁ、どこかで見かけたことがあるなぁと思ったら、マーベラスの本柳選手じゃないですか！』と言い出したら、貴方ならどうなさいますか？」

「帰ります。話にもなりませんから」

「でしょ？　でも彼は、お祓いの対象である筈のあなたのことが話題に上る度に私が話を逸らすように仕向けてきてるんですよ、あの

夜。都合三回ですよ？　おかしいでしょ、このお祓いに命がかかってるのに」

「あっ……！　確かに！」

納得してくれたようだ。もうこの方向で話を進めても、横槍は入ってこないだろう。ちなみに本柳氏は、後に本人から聞いた話によると、あの夜稲葉祟りを妨害した私も彼と同罪だと見なし、祟ってやろうと付け狙っていたらしい。

「まあ一回目は彼の反応が見たくて私のほうも話を逸らす気満々だったのですがね」

言っているうちに照れ臭くなってついつい頭をボリボリとやってしまった。

「で、私が逸らす前に彼から仕向けてきた時点で充分怪しかったのですが、まだ確信が持てませんでしたので、かけさせていただいた訳ですよ、カマを」

「それがあの縛ってる相手云々ですか……」

そう。そして稲葉は、答えてしまったのである。『殺します……ね』と。

「最後の『毘沙門様』もそうなんですけどね。あれはロールシャッハテストの応用みたいなものでして」

人が何かに対して持つ印象など、千差万別なたいへん抽象的なものである。極端な場合、同じ人に対して同じ物を見せているにも拘わらず、印象を聞いた結果日によって全く違う答えが返ってくることさえあるほどだ。それを精神状態の判断に用いたのがロールシャッハテストという心理テスト。

本来ロールシャッハとは、白紙の上にインクなり墨汁なりを垂らして、そのシミが何に見えるか答えてもらう形式なのだが、私はそれを毘沙門像の印象に置き換えたのである。

「彼が私の最後の問いに、何と答えたか貴方は覚えていらしゃいますか？」

「『何かを断罪しているように見えますね』」

「ロールシャッハは法廷で精神鑑定の根拠として認めてもらえるレベルの信憑性を持っています。彼はやってしまったのでしょうねぇ。毘沙門様から断罪されなければならないような……、何かを」

それが殺人教唆であることはほぼ間違いないだろう。

「……、神主さん……。まず最初に、今まであなたを盆暗だと思っていたことを詫びさせていただきたい」

突然本柳氏が頭を下げてきた。正直こういったことはけっこうあることだ。私は極力人前では盆暗に振る舞うようにしているのである。

「頭を上げてください。私がそう見えるように振る舞っているのですから、あなたがそう思うのも当然なのですから」

「まさかあの盆暗なやり取りの中で、そこまで計画的な尋問が行われていたとは、お見それしました！」

頭を上げろという私の言葉を全く無視して、土下座の態勢を保ったまま本柳氏は言葉を続けた。そして、氏はさらに続ける。

「神主さん、その話術を見込んで一つお願いがあります！」

と。

どうやら氏の土下座の本意はここから先の話にあるらしい。

「おうかがいしましょう。どのような頼み事ですか？」

土下座をして頼み込むということは、おそらく無理難題に近い話なのだろうとは思うのだが……。

20　本柳照文はチャンスを与えようとしている

自分が原因で球団が金欠に陥っていたことは解っていた。そして、そのせいで稲葉の家庭が崩壊したことも解っている。だからといって俺が殺されたことを納得しろと言われても無理な相談というものだが、このまま無下に祟り殺してしまうのも、事件の取っ掛かりが俺であることが明白である以上、良心が咎めることも確かだ。

「神主さん、なんとか稲葉を詫びに来てくれるように仕向けて頂けませんか」

虫のいい話だとは思う。妨害されてからというもの、今の今までずっと付け狙っていたうえに更に盆暗だと思い込んでいた相手なのである。

それに加え、あの夜『殺人犯は相応の報いを受けろ』と独りごちていたのだ。今更助けてやってほしいと言っても、聞いてはもらえないのかもしれない。

「貴方は殺人犯を許せと、殺人犯が裁きも受けずのうのうとシャバの空気を吸うことを許せと、そうおっしゃるんですか？」

だろうな。そう来るだろうことは予測は付いていた。この神主、因果応報の権化のようなところがある。

「俺は始めから、状況によっては許そうと思っていたんです」

「自分がしたことの報いは相応の形で受けなければならない、それが人の世の理です」

なぜこうまでこだわるのだろうか。いったいこの神主に何があったのだろうか。そんなことを俺が詮索してもしょうがないが、こうまで強いこだわりを見せられると気にせずにはいられなかった。

「ならば俺も……、受けなければならない筈です。そもそもの元凶が俺の高額年棒なんですから、ある意味これも報いなんじゃないですか？」

「でしたら貴方はこの件から撤退してください」

撤退しろと来たか……。

「なんでそうなるんですか！」

「貴方ご自身がこの報いに納得していらっしゃるなら、なんの問題も無いでしょう？　祟り主である貴方がもう許すとおっしゃるなら、あとは貴方が撤退なさるだけで一発解決です」

うっ……、たっ、確かにそうなのだが……。

「納得はできません。でも、俺にも負い目があるし、あいつが詫びてくれれば水に流すつもりでいたんですよ」

「……、神というのは良くも悪くも強大な力を持った霊のことを指します。貴方が祟り神でなくてよかった。……、乗りますよ、その話」

また計画的な尋問か……。この人、神主なんかじゃなく警官になったほうがいいのじゃないのか？

「ありがとうございます。あなた、刑事になったほうがいいんじゃないですか？」

「刑事は……、儲かりませんから」

これほど実直な神主からこの言葉が出て来たのには、心の底から驚いた。

「稲葉選手が離脱してからもうじき一ヶ月目ですか。そろそろ来そうですねぇ」

「何がですか？」

「『ストラップ効かねえぞ！』のクレーム電話」

なるほど確かに。俺が直接コンタクトを取れなくなったとしても、あいつにとってもっとも危険なビーンボールに効果が無ければ、何の意味もなさないだろう。

「それにしても、運が良かったですよ。あのストラップにビーンボ

ールまで封じられてたら、納得できないままに撤退しなきゃいけませんでしたから」

「は？　わざとですよ。さっきから申し上げているでしょう。相応の報いを受けてもらうと」

良かった。本当に神主との共闘の申し出を受けておいて良かった。

この神主、絶対に敵に回してはいけない兵（つわもの）だ。

そして、神主の読み通り、稲葉からの電話がその翌日にかかってきたのである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0321f/

死神召喚

2010年10月9日03時37分発行